

場面 1

むかしむかし、おじいさんとおばあさんが日本の山あいの小さな村にすんでいました。正直で働きもののふたりでしたが、子どもがないので、さびしく思っていました。ある日、おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯にゆきました。

場面 2

おばあさんが、せんとくものから、ふと見上げると、大きな桃が、どんぶらこ、どんぶらこ、と流れてきます。

「まあ、なんと大きな桃なこと！もってかえっておじいさんに見せましょう。」

おばあさんは、バシャバシャと川のなかに入り、桃をころがしながら岸へ引き上げました。

桃があまりに重たかったので、そっと手おし車にのせて、家にかえりました。

おじいさんとおばあさんは、夕飯がおわってから、その桃を食べることにしました。

そっと、桃のやわらかな皮を切ろうとすると、中から大きな泣き声が聞こえました。

いったい、なにが出てきたと思いますか？

場面 3

桃がパカッとふたつにわれて、なんと、なかから、まるまる太った男の子が飛び出してきました。

おじいさんとおばあさんは、ずっと子どもを欲しがっていたので、たいそうよろこび、その子を「もも太郎」と名づけ、育てることにしました。

（「もも太郎」とは日本語で、桃から生まれた男の子、という意味です。）

もも太郎はなんでも、モリモリよく食べる子でした。野菜とくだものはとくに大好物で、どんどん強く大きくなりました。

おじいさんとおばあさんにかわいがられ、もも太郎は心の優しい若者になりました。

場面 4

そのころ、村では困ったことがありました。

鬼が島から、大きい黒船にのった鬼がやってきては、村人のたべもの宝物を盗んでゆくのです。

ある日、もも太郎は、おじいさんとおばあさんにいいました。

「これから、みんなの宝物を取り返しに、鬼が島へ行って、鬼退治をしてきます。

これ以上、みんなが苦しむのは見てられません。」

おじいさんとおばあさんは、なんとも恐ろしいことだ、と、もも太郎を止めました。

しかし、もも太郎の決心はゆるぎません。

「今、ぼくが行かなかったら、この村はどんなことになるだろう？

もう一度、ここに平和をとりもどすんだ！」

場面 5

おじいさんとおばあさんは、とても心配でしたが、もも太郎の、みんなを助けたいと思う気持ちが誇らしくもありました。そこで、おじいさんは、もも太郎に静かに言いました。

「これは何代にも伝わる家宝の剣じゃ。正義のために使うと特別な力を発揮する。持ってゆきなさい。」

おばあさんは、たくさんのキビダンゴを作ってくれました。

「これは我が家で何代にも伝わる秘伝のキビダンゴ。おまえに強さと勇気を与えてくれるよ。持っておゆき。」

もも太郎はおじいさんとおばあさんを、ひしと抱きしめ、お別れをいいました。

場面 6

もも太郎が鬼が島に向かって歩いていると、ひとなつこい犬が飛び出してきました。

「もも太郎さん、おいしそうなキビダンゴをもって、どこへおでかけですか？」とほえます。

「鬼が島へ、鬼退治に！宝物を取り返すんだ。おまえもくるかい？」と、もも太郎が答えます。

「もちろん、お供します。あの悪い鬼たちに、大好物の骨を盗まれました。」

もも太郎は犬にキビダンゴをひとつわたすと、一緒に歩き出しました。

しばらくすると、今度はサルが木の上から声をかけてきました。

ふたりが鬼が島へ行くと聞くと、キーキー叫びました。

「私もお供します。あの鬼たちめ、おもしろ半分に木を切りたおしていったんだ。」

もも太郎はサルにもキビダンゴをひとつあげました。

またしばらくすると、こんどは道ばたの草むらからキジが話しかけてきました。

「どうぞ私もお供させてください。あの鬼たちは、私たちを追いまわし、きれいな羽をむしったのよ。」

もも太郎は家来が増えたので喜び、キジにキビダンゴをあげました。

そして、4人の勇敢な冒険者たちは鬼が島に向かって行進してゆきました。

場面 7

海辺にくと、漁師から小さな船をかり、いよいよ、鬼が島へ出発です。

夜になると、もうれつな嵐がもも太郎たちの船をおそいます。

かみなりがライオンのようにうなります。

いなずまが走るたび、おなかをすかせた、とんがり歯のさかなたちが、船のまわりを泳いでいるのが見えます。

小さな船がまるでボールのように、つめたい波にたたきつけられる中、もも太郎と仲間たちはお互いにしっかり、だきあいました。

二日間の船の旅をへて、ようやく恐ろしげな鬼が島にたどりつきました。

島全体が、まるでかいぶつの顔のようです。

(絵の中の目のついた島を指差す)

場面 8

波打ちぎわに、大きな門がそびえたっています。

「門をあけろ！もも太郎だ！話がある！」もも太郎が叫びます。

返事はありません。

そこで、キジが門をとびこえてカギをあけます。

もも太郎が、門をけて、開けました。

バンッ！

そこはかつて人間がいちどもは言ったことのないところでした。

もも太郎たちに鬼もビックリしています。

もも太郎たちを止めようとしますが、いぬは手足にかみつきます。

さるは顔をひっかきます。キジはあたまをつつつきます。

そのあいだに、もも太郎は鬼の大將の城へと、とっしんします。

場面 9

城へつくと、そこには大将がフカフカのざぶとんに横たわり、酒を飲んでいました。

「おまえはだれだ？ちびすけめが！」といじわるそうに、にたりと笑います。

あごにはなめくじのようにお酒がながれています。

「ぼくは村からやってきた、もも太郎だ。おまえたちは村から宝ものをぜんぶぬすみ、みんな困っている。

宝ものを取り戻し、二度とそんなことがないようにしてやる。」

「は、は、は、は、はー！できるものならやってみろ。だが、まずはおれ様を負かしてみろ！」

大将はあまりに笑ったので、鼻からお酒が飛び出しました。

場面10

もも太郎は最後のキビダンゴをとりだすと、ぽん、と口にいれました。力が、からだじゅうにみなぎってきました。

もも太郎は、秘伝の剣をあたまの上でぐるぐる回します。

大将も、もも太郎がただのこどもではないことに気が付きました。

でも、弱いものいじめが大好きな大将は自分より小さいものをいじめたくなります。

いじわるそうに笑いながら、きいろのツノをゴシゴシとこすりました。もも太郎の剣にうでのをのばし、がけの端までにじりよりました。

場面11

もも太郎がいまにもガケから落ちそうになった瞬間、いぬ、さる、きじがやってきて、あっちこっちから、大将にとびかかりました。

そのすきに、もも太郎の秘伝の剣がとび、鬼のツノをスパッと切りおとしました。

「うわ～！」大将のなさけない叫び声は島じゅうにひびきました。ツノがなくなった瞬間、大将はヘナヘナと、古いくつしたのように、地面に倒れました。

「やめてくれ～！」大将はもう、なみだごえです。

「もう二度と村をおそったりしない。約束するから、ゆるしてくれ～！」

「宝ものはどうするつもりだ？」もも太郎は顔をしかめて言います。

「約束は約束だ。ほら、あそこをみてくれ。」

もも太郎が船の方をみると、鬼たちがすでにぬすんだ宝ものを積み込んでいます。船がいっぱいになると、もも太郎と動物たちはかえってゆきました。

しまを振り返ると、ビックリしたことに鬼たちが浜辺で、ふかぶかとおじぎをしています。

場面12

もも太郎たちが村にもどると、みんなが走り出てきてお礼をいいました。

「もも太郎が鬼が島から、帰ってきたぞ～！ばんざーい！ばんざーい！」

もも太郎は宝ものを、もとの持ち主に返し、村には、ふたたび平和がやってきました。

もも太郎、村人、動物たちは、みんないつまでも幸せに過ごしたとき。

二度と鬼をみかけることはありませんでした。

鬼たちも自分たちの島でいつまでも幸せに暮らしていたのかもしれないね。

おしまい。